

それから、二年が過ぎた。

鶴谷八幡宮はこの年、永正四年（一五〇七）に修繕された。この頃、二六歳の里見実堯に男子が誕生した。

「普請のさなかに生まれるとは、この子は里見のため、何事かを為する者となるろう」

里見義通も大喜びでこれを称えた。

里見氏庶流の子である以上、いずれは主家のために力を尽くして欲しいというのが義通の願いであったし、父である実堯もまた、己の如く主家へ一層の忠勤を励む者に成長することを祈らずにはいられなかった。

この子供こそ、のちの里見義堯である。

さて。

里見義通は日に一度は、必ず普請場へ顔を出した。

「佐助、精が出るな」

「へい、大殿」

このように、人足一人ひとりへと声をかける心懸けを怠らなかつた。このような気配りは、作業に従事するものにとつても、まことに

「勿体ない」

ことであつた。

「こら、大殿の御前で手を休めるな」

大工頭の隼人佐家吉が人足たちを叱責するの、常なることだつた。

「これこれ、そう急くな」

義通が笑つた。

「しかし、大殿」

「隼人よ、時間を費やしてもよい、いい仕事をしておくれ」

これもまた、義通が常に隼人佐家吉に掛ける言葉だ。

「励め、便りにしている」

大工としては発憤させられる言葉である。そう云われれば、やはり素早く荘厳華麗なものを造り上げたくなのが人の心といえよう。

この普請の直接采配する奉行は、正木大膳亮通綱という。

「大殿、あまり普請場を歩かれては危のうござります」

「気をつけているつもりじゃ」

「何か起きては、皆が困ります」

また叱られたと、義通は笑つた。

正木氏は、もとは江戸湾を隔てた地・三浦半島で勢力を持つ名族・三浦氏の当時の棟梁である三浦介時高の子・弥九郎が安房へ逃れて、正木郷の豪族・正木義時に庇護されたところから興っている。弥九郎が安房へ逃れたのは、養兄・義時に時高が討たれ、家督を横領されたからに他ならない。安房と三浦は鎌倉幕府の時代から密接で、双方の血縁も多い。時高はこのような事態を想定して、弥九郎の落ち延びる先を手配していたのだ。

そして、この弥九郎こそが、正木通綱である。

里見義通は諱を送り

「重宝の臣よ」

と正木通綱を重んじた。

彼は在地豪族のひとつ、正木氏の棟梁として、その力を発揮した。内政のみならず外交・合戦に至るまで、まさに義通秘蔵の知恵袋である。

「大殿は優しく皆に申すがな、さほどにのんびりとしては困るぞ。この社には源氏の守り神が鎮座しておられる。早く落ち着かれて欲しいと、大殿は真摯に願っておる」

厳しいことを口にする役目は、まさに正木通綱の仕事だ。そして、ときおり酒を運んで労うことも忘れていない。飴と鞭を巧みに使い分けていた。

永正五年（一五〇八）九月二五日。

鶴岡八幡宮は修繕がおわり、その神事が執り行われた。古河公方家からは、足利家幸ともいえる築田政助が足を運び、鎌倉からは玉隠英興が列席した。

この修繕にあたり奉納された棟札には、こう記された。

今上皇帝千秋万歳天下泰平

国土安全珠鎮守府將軍

源朝臣政氏武運長久

大檀那副師源義通

權別当熊石丸

自らを古河公方・足利政氏の副師すなわち代官であるという宣言である。

鶴谷八幡宮の修繕は古河公方のために祈願するものであり、ひいては里見氏が、その名代としての立場を安房に宣言したことを意味する。

古河公方家としては、そういう権威付けを関東各地の豪族に行っていたのだろうが、大義名分を重んじる当時の風潮には格好の認可でもあった。

もちろん、古河公方・政氏としても、分裂しようとしている御家内紛に際し

「当方被官」

が多く欲しかった時期であったから、この手の濫発にも意味はあったのである。

里見義通はこの神事に関して、一切の饗応の采配を正木通綱に託した。その期待についても、通綱は見事に応じた。正木通綱は義通にとつては妹婿にもあたるから、この手の

「阿吽の呼吸」

は常のことといえよう。

この修繕について、別当として名を連ねているのは、義通の子である熊石丸義弁である。幼くして那古寺へ送り、義秀のもとで修行した人物だ。この晴れやかな神事に名を連ねるのは、義秀の心遣いでもある。

このような人の心が交錯する神事にあつて、義通の嫡男・義豊の心は別のところにあつた。その義豊に対し、じつと視線を傾ける者がいた。

玉隠英瑁。

高齢でありながらも足腰の丈夫な人物で、建長寺の住職も務めた高僧である。戦乱による鎌倉の荒廃を憂い、関東管領上杉氏や古河公方に

厚く帰依され復興に尽力してきた。かの太田道灌からも崇拝されていたといわれる。

その玉隠英瑁は、興味深げに、里見太郎義豊を見つめていた。

実は、義豊は内々に玉隠英瑁と書簡を交わす間柄であった。在地分権から（一統）にという持論を、玉隠英瑁は常々から面白いと感じていた。

引いてはそれこそ、足利公方家を中心とする関東静謐の理論に通じる。そしてこの理論を説く者は、この当時、足利にも上杉の家中にも存在しない。

+++++

鶴谷八幡宮（3）

夢酔 藤山